

位藤俊一（編）

乳房画像診断最前線 超音波診断を中心に

光山昌珠

北九州市立医療センター名誉院長・理事

超音波診断を中心に、現時点での乳房の画像診断における最新の情報を網羅した書籍『乳房画像診断最前線』が出版された。りんくう総合医療センター外科主任部長の位藤俊一氏が編集しているが、日本におけるそれぞれの分野の専門の医師・検査技師の第一人者が執筆担当しているのみならず、医療機器の開発に携わっている研究者も担当していることもユニークであり、最前線と名付けている所以と思われる。

本書はⅠ～Ⅵ章で構成されており、第Ⅰ・Ⅱ章は総論で、乳房の画像診断の新しい流れと病理を解説しており、とくに病理では基礎的な知識と悪性例を中心とした代表的な乳腺腫瘍を解説している。超音波のみならず、画像診断に携わる医療従事者にとって、画像から組織型を推定しながら良・悪性診断に至るために、組織型をよく理解することが必修条件である。第Ⅲ章では超音波検査のBモード評価の基本的な事項、カラー Doppler 検査、エラストグラフィ、3D/4D 超音波や保険収載となった造影超音波検査、リアルタイム超音

波断層検査を分かりやすく解説している。また、現在乳がんの手術においてはセンチネルリンパ節生検が標準であり、転移陰性であれば腋窩リンパ節非郭清となり、患者の QOL 向上に貢献している。その同定法や手技などについても述べており、画像診断者も理解しておく必要がある。第Ⅳ章では超音波以外の代表的なモダリティとして、マンモグラフィ、CT、PET/CT、MRI がそれぞれの画像を用いて、基本的な事項について触れている。

第Ⅴ章ではケースファイルとして、特殊型を含めた悪性疾患や、日常診療で悪性疾患と鑑別を要する良性疾患について代表的な症例を、きれいな超音波、マンモグラフィ、MRI 画像を用いて提示している。そして、鑑別すべき病名を挙げ、診断の流れ、考え方や注意点など切除標本や病理組織標本とともにわかりやすく解説し、その後の最終的な治療に至った経緯まで触れており、日常の臨床に大いに役立つものとする。

第Ⅵ章では術前画像評価による治療方針の決定についてを取り上げ、

術前化学療法、内分泌療法の意義やその画像評価を解説している。術前治療後の画像評価は、効果判定は当然であるが、手術術式やその後の治療方針を決定するうえで重要であり、乳腺医のみならず、画像診断従事者にとっても興味ある内容である。また、Non-surgical ablation ではその画像評価の重要性や病理学的効果にも触れており、現在ラジオ波焼灼療法（RFA）の臨床試験が進んでいるので、その理解のためにも一読の価値がある。最後のインターベンションではそれぞれの適応や注意点が述べられ、臨床上非常に有用である。

本書は画像診断担当者のみならず、乳腺診療に携わるすべての医療者にとって、最新の画像診断を学ぶことができるとともに、最高・最良の乳腺医療を提供するための現時点での最適のテキストブックと考える。

●A4/頁 280/2013 年/定価 8,925 円

（本体 8,500 円＋税 5%）

[ISBN978-4-524-26211-3]

南江堂 刊